２０２３年7月2日　Ｎｏ.３６７４

先週の講壇から　　〝何をして欲しいのか〟

マルコによる福音書 第10章46節～52節

聖句「イエスは、『何をしてほしいのか』と言われた。盲人は、『先生、目が見えるようになりたいのです』と言った。」(10:51)

1．《盲人ネタ》　古典には、その人の「目が見えないのをいいことに…」というネタがあります。「創世記」のヤコブは、目の見えない父を騙して祝福を奪い取りますし、チョーサーの『カンタベリー物語』では、失明した騎士の目の前で、若妻と従者が浮気します。落語の「按摩の炬燵」では、番頭や手代や丁稚などの奉公人が按摩に酒を飲ませて、その温まった体を炬燵代わりにするのです。

2．《心と言葉》　古典落語には障碍者をイジるネタが数多くありましたが、噺家は高座に上ると客席を見渡して配慮し、臨機応変に演目を変えたと言います。牧師の説教などでも、目の前の人たちに向かって語っているか怪しい場合があります。橋本龍太郎首相が広島の「原爆病院」を問安した際に、被爆の後遺症に苦しむ患者に「病は気から」と失言をしました。首相は「励ますつもりだった」と弁解しましたが、受け取る側がどのように感じたかということが一番大切です。私たちも不適切な発言をする場合があります。相手の状況に対する理解と認識が不足していれば、励ますつもりが、却って傷付けてしまうかも知れません。本当に相手のことを思い遣るのであれば、余計な弁解などしないで、素直に謝るしかありません。

3．《語りかけ》　ある牧師が盲人バルティマイの説教を準備していましたが、丁度、同時期に教会員が失明して、何を語るべきか大いに悩みました。しかし、悩み苦しむ時にこそ、聖書からメッセージが与えられるのです。盲人の目が癒された奇跡としてだけ読んでいたので、大切な福音が見失われていたのです。バルティマイは目が見えるようになって主の所に来たのではありません。むしろ、周囲の人たちは彼を妨げるバリアとして働きます。しかし、イエスさまは、そのままの彼を認めて、先ず「あなたが必要とすることは何？」と、彼のニーズを尋ねられたのです。一番大切なのは、その人の必要を尋ねる語りかけだったのです。

朝日研一朗牧師